はぐれ月夜

R:18
ADULT ONLY

羅刹地獄変

戦国サイバー藤丸地獄変本です。

●年前に描いたモノも再録しつつ
（さらに●年前に描いたのもあったのですが、
さすがにもう見返すと恥ずかしくて…
今回収録はやめました。いや、当時のはエロ
じゃないんですが、エロじゃない方が恥ずかしい…）
まあ、そんなこんなでごちゃごちゃした
統一感のナサですが、本が出せてうれしい～！！

やっぱりこの世界観が好きだな～と、
資料用に自分のプレイした動画DVDを
見つつ思ったりしてます。

…のワリにエロばっかなんですが！

ではでは。

■風子ちゃん■
●才にして、スリーサイズが87.9㎝、57.6㎝、84.8㎝
という驚異のプロポーションの持ち主。
ミニスカくのいちで、敵にのみパンチラ（もしかしたら穿いてない可能性も）
を見せて攻撃するのでどっちかというと敵になりたい。

傍太と２人、アイテム探しに出ても帰ってこれるだけの
脚力はとにかく魅力的でした。

韋駄天風子の異名を持つからにはやっぱり
足プレイがいいな～と思いつつも、
もしも鮮丈が足フェチだったら
せっかくのプロポーションも無駄に終わりそう。
（奴はメカキチだからそこらへんの好みもマニアックそうで…）

ザァァァ

ちっ

なんだよ
降らねーって
言ってたのに

まったくジジイの
読み、全然当てに
なんねーな

雨ごいばっかりやってるせいじゃねーか？

■雨宿り■

かなめの
庵が近くで
よかった

止むまで
よってくか

まだ
明かりも
ついてるし…

…っ!!
はぁ
くちゅっ
ちゅぷっ
…ん
ちゅぷっ
ちゅぷっ
ちゅぷっ
ふぁ♡
あ
は♡

むにゅっ
おっぱっ
ぎゅぷっ
…さま
もっとして下さい
お役に立てるなら私…
あ
も…っと
ちゅっ
ちゅっ
はぁ
あ
しゅっ
だから
…あっ
私を
…ごくん
あ
…使って

ビクンッ
は…あ
あ、あ
ぶしゃっ
ぐぷっ
ぐぷ
ぐぷ
ぐぷ

ガラ!!

ビクッ

ザァ

ァァァ

…あ

あの…ふ

藤丸さ…

ナ!!
ガ!
ッ!!
ヤ!!!!
ボ!!
藤丸様!!
ダメです!!
やめて下さい!!

ガ!!!
あがいあ
ッ
ッ
!!

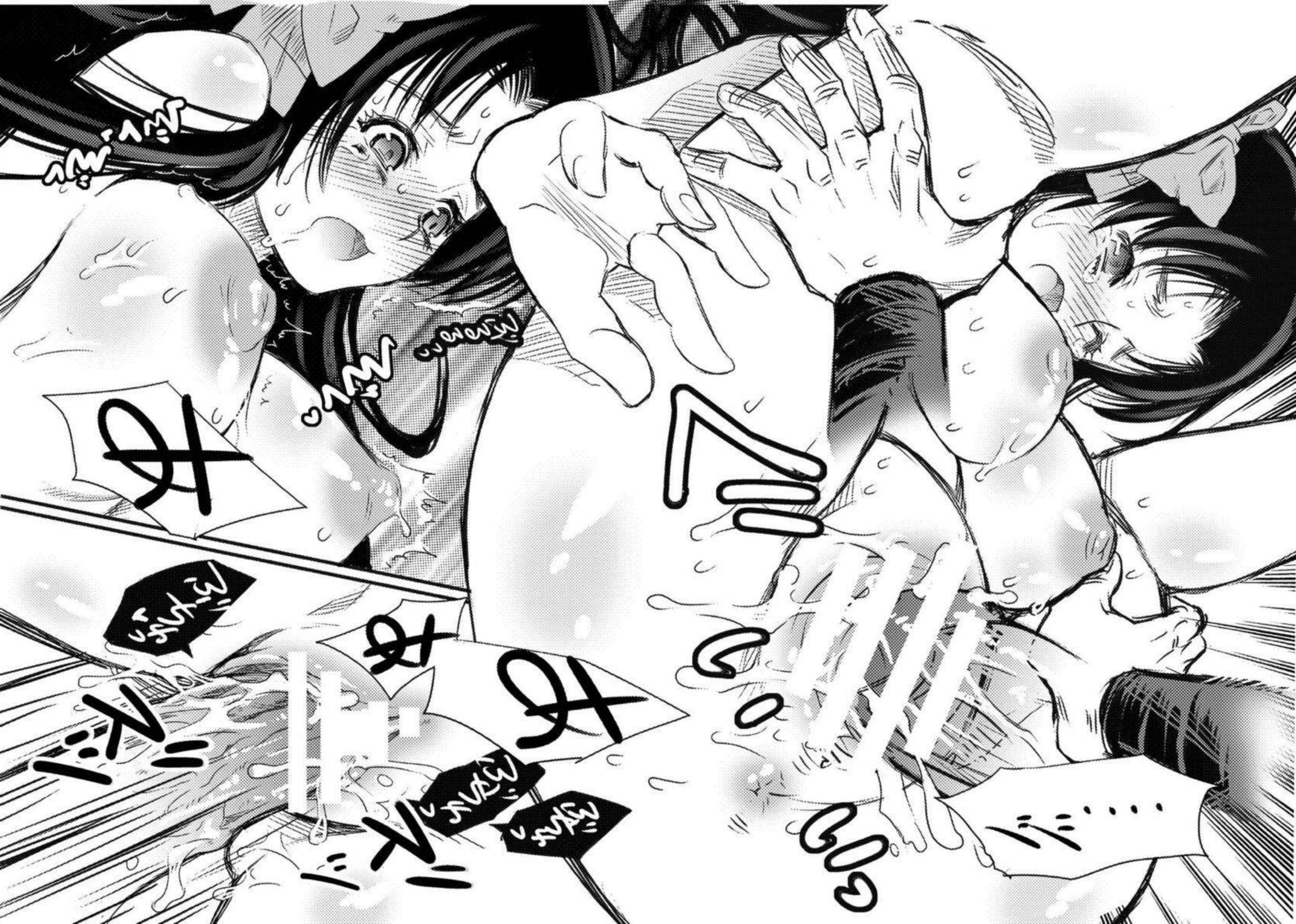
……ッ
あ

ペロ

……すみませ…
ん…っ

……

きゃ…
あ


ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ

ゲスゲス
ゲー
欲しかったんだろ？
ぐっ
もっと喜べよ
…なあっ!?
ぶっ
ぶっ
あがあがあがあ

…まァ聞かなくても分かるか
こんなに咥えこんで離さねェんだし
にちっ
にちっ
にちっ
にちっ
どくっ
どくっ
どく

ちゅるるるる

デケー乳

これも俺の好きにしていいんだよなァ？

ビクッ

ビクッ

ビクッ

藤丸さま…っ

だめ

まりゅうう♡

ズリ

ダメ

だめ

私は

あぁ♡

まりゅ♡

まりゅ まりゅ

ズリ

ズリ

まりゅっ♡

おなか…い♡

やめ…てぇ…っ♡

ふぁ♡あ

ぜぇ ぜぇ ぜぇ

は…♡

ぜぇ ぜぇ

ちゅぷっ
ちゅぷっ
ちゅぷっ
ぢゅるっ
ぢゅるっ
ぢゅる

ぶっ
じわ・ノビ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

ア ア ア

…すみません

藤丸さま

私のような

卑しい歩き巫女などに

触れさせてしまって

貴方はこの世界を導くという大事な使命を持った方なのに

私などに触れては汚れてしまう

貴方と私達はちがう――…

おら

ビシッ

きゃっ!?

何が卑しいだ
いやらしいの
間違いだろ

ビシッ
痛！

何言ってんだ
バカか
てめえ

ビシッ
痛っ

おい

もっかい
ヤラれたい
のか、
んん？

ビシッ
痛っ

言っとくが
俺は
謝んねーぞ

誘ったのは
お前
だからな

誘われりゃ
つい
のっちまう

俺はそんな
ただの男だし

お前だって
ただの女だろ

お前が思うような
人間じゃねえよ

変わんねえよ

俺も
お前も

お前に何が
見えてんのか
俺には分からねえけどな

この先、俺らは
自由になるんだろ？

戦うのも

戦わないのも

命令なんかじゃなく
自由にさ

やりてえ事とか

行きたい
所とか

それから
その
なんだ
ほほほ
惚れた相手に
だ、抱かれてえってのを
言えるようになるってのも
自由の一つじゃないのか
かぁぁぁぁぁぁ

惚れてる…？
お前、俺に惚れてんだろ？
ルパ 何だこのハッキリしねー反応は ルパ
えっ!?
あはあ
あれっ!?
…まあ

ま
だからよ
少なくとも俺についてくるのなら
お前自身が自由でいろって事だよ
くだんねえ事に捕らわれんな

俺たちは
今だって

心だけは自由に
生きていいんだから

あ…

な？
かなめ

ぺっ

二度とそんな
つまんねえこと
言うなよ

今度言ったら
里から
ほっぽり出すからな

…はい…！

…

ぎゅうっ
むぎゅっ

…なあ
かなめ

！

だめ
だめです！
もうダメ！

なんでだよ
まだ自分は
卑しいとか

そーゆー話では
なくて…っっ

じゃあ
いーだろ

なんですか!?
あの…っ
そういった事を
拒否するのも
自由！
自由なんです
よねっっ!?

ねっ!?

…ぐ…っ

■終わり■

●黒兵衛＆朧影のかなめ●
この二人はせつないというか
やるせないというか・・・。

藤丸＆かなめマンガ→
かなめは、藤丸に対して恋愛は抱いてないだろーなーと思ってます。
藤丸の役に立ちたいとは思っているけれど、恋じゃない。
自分の先読みの力の結果が知りたいという気持ちが、優先、という感じ。
頭領として、藤丸への尊敬があって、それはあくまで部下として。な気がします。
（や、上司オカズにするのはアレですが…）

以下、この後に描いてるモノについてなのですが。

黒兵衛とかなめはエンディングがエンディングだったのでもー、イロイロ妄想が…っ。
黒兵衛×かがり小説では、ノーマルですが、
絵本調（？）の方では性的不能として描いてみました。
（黒兵衛ゴメン…でも好きなんだー、顔を勝手に模造するホドに。…だって顔不明なんだもん…）

あと、ずーっと、黒兵衛 、年齢不詳だと思い込んでまして。
27～35歳ぐらいかなーと、これまた勝手に模造していたんですが、（…なのでウチの黒兵衛は27～35歳で…。）
今回、キャラ表とか見てみたらちゃんと書いてありまして…22歳！
お、思ったより若かった…！！騨丈より年下なのも意外…騨丈が若く見えるからなあ。
でも思えば、あの言動と行動は22才らしいといえばらしいなあ…！！

■藤丸＆かがり■
かがりに関しては初回プレイ時に
放置だったのでエンディングみて
驚きました。
もちろんその後にプレイする時には
なるべく藤丸とペアで
行動させるようにしましたとも！！

ページの都合でこんなトコですが、おくづけ！

今回難産だったのはリプレイまんが。
そんなのを描いた事がなかったのに、
藤丸のゲーム説明にもなるし！！
とか思ったのが浅はかでした。
結局紹介にもならんマンガに…うううう。
でも描いてて楽しかったです、
もうちょっとなんとかしたかったけど！

そんな中、気分転換に描こうと思った
藤丸×かなめの漫画があっという間に
リプレイマンガを放置でガンガン進みました…。
そして思いのほかのページ数に。
最初、表紙は藤丸×かなめだけど、
マンガは無しの予定で、
でもそれじゃあんまりだなあ…
せめて5ページぐらい…のつもりだったのに。
で、あれこれページの帳尻が合わなくなって
ここであとがきです。

ですが、結果的に思ったよりも厚みのある本になってうれしい～。
ゲストさまも呼べて、私としては大満足な本になりました。
そんな自己満足な本ですが、少しでも楽しんでいただけましたら幸いです…！

酔花(スイカ)
2010.05.02
祝！パンドラMAXシリーズ＆兄弟姉妹作品プチオンリー開催！！

「はぐれ月夜」

2010.05.02発行
印刷・大陽出版

酔花　　（すいか時計）
メール：suikadokei@yahoo.co.jp

■この本の禁止事項■
・18才未満の方の購入＆閲覧
・無断転載　及び　複製（ネット公開、CDROMなども含む）
・オークションへの出品（成人向けにつき特にお願い致します）
どうぞご協力のほど、宜しくお願い致します

ナイショ
藤丸地獄変 ・「ナイショ」
風子！
そんなトコで何やってんだ？
！
あ
驊丈…
わ
わ!?
ちゃんと見せてみろ
痛いっ
痛いだだだだだ
わうわわっ

めちゃくちゃ腫れてるじゃないか

なんで黙ってた？

うぅぅっ いったぁ〜い

だって大した事ないだあ？

大したこと

痛っっ

痛い痛いっ

こんな足で明日の戦に出られるワケないだろーが

いったああ〜いっっ

ほらかなめのトコに行くぞ

ぐいっ

なんだよっ

もっとやさしくしてくれたっていいじゃんかよう

わ
わ
わ!?
承知
え?
ええ?
やさしくしてやるよ
なっっ
何すんだよ離せばかっ
やめろって!

ふああっ!?

ぴくぴく

ぴくぴく

やちょっと やめろって

騨丈の舌が

この変態…っ

きゃっ!?

指の間を這い回って

ぬるぬる

はぁはぁ

ん・んんっ

ぬるぬる

ぬるぬる

ぬるぬる

くすぐった…い?

うぅん 違う

はぁはぁ

やだ ちょっと …ねえ

吸われたり してるだけなのに

ホントに もう いい加減にしろよ 騨丈…っ

あ♥

んん？
どこか痛いのか？
あ…ん♥
どうしよう どうしよう
こんな事言っても いいのかな
でも ちょっとなら ちょっとなら いいよ…ね？
い、痛いって事じゃないけどさ
ここも
…ここもやさしく…して？
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ

ん…っ!!ちゅぷ
ちょっと
騨丈!?
そんな奥まで
舌っ　挿れていい
なんて…っ♥
こらっ
やめろっ
騨丈ッ
言ってないっ
だろ…っっ!?
ちょちょちょ
ちょっと
何何何
何してんのさ
そんな事して
いいと思って…
!?
嘘っ
ばかっ
挿れてる!?
挿入ってる!?
挿入ってるよねコレ
挿入っちゃってるってば
だんじょおっ

吸・吸うなああっ♥
やああっ
騨丈っ♥
やさしくしてって
言ったのにッ
騨丈のばかっ
大ッ嫌いっ♥♥
嫌いいっ♥♥
——風子

ミルク
ドンッ
ドンッ
ドンッ

あ
なんだこりゃ
クツに詰めモノ
なんかして
こんなの
履いてたら足、
痛めるにきまって
んだろ　馬鹿か
！

返せよっ
いーだろ　別に
あたいの
勝手じゃん
勝手だあ？
てめえの勝手で
藤丸（仲間）に迷惑が
かかるんだよ

そんな足に
合わねえモン
捨てっちまえ
うるさい
うるさい
騨丈
うーるー
さーいー!!
…だって

だって
騨丈が
くれたから
うわ〜〜〜っ
や
だったらそんなの
いくらでも寸法
合わせてやるから
…うれしかった
んだもん
そーゆー事は
早く言えよ
な？
…うん
分かった
――…って
何また出してんのさ
さっきのだって
許したワケじゃないよ
ぎゅうぅぅ

■終■

過酷な
勝負のため
戦欠場。

■はぐれ月夜■

黒兵衛×かがり

「かがり殿」
誰のいないと思っていた闇から呼ばれ身をすくめる。
「…黒兵衛さん」
知った顔にほっと息をつく。

忍びの人達は元々気配をほとんど感じさせない。
日中ですら急に後ろから声をかけられて飛び上がる事も多かった。
ましてや黒兵衛はじめ、伊賀忍者などの隠密での情報収集を主に
生業にしてきた忍び達は特にその傾向が強かった。
「もう、驚かさないでください」
月あかりに照らされた小川のそばでかがりは思わず構えていた刀を鞘に戻し額の汗をぬぐう。
「申し訳ない。普通に来たつもりでござるが…」
月あかりで照らされた道でなくわざわざ雑木が生い茂った所を通るのがこの人の普通なのか。
げんなりとため息をつく。

「人の気配を感じたものでな」
「…そうですか、すみません」

剣術の皆伝を持っている腕は自慢だったが
この里にいる人達の中では意味がなかった。
忍びに通用する剣術はまた別の技術が必要だった。
早々に忍剣術の皆伝をおさめた黒兵衛が、片手間に剣術を教えてくれるようになったのだが
どうにもついていけない。

そもそも黒兵衛は技術はあれど人を指導する事には向いていなかった。
男女の体力の違い、忍びとただの剣士との違いが理解できないままに
指導をしていたためなのだが。かがりにはそれは分からず、
自分はまるで才能がないように思えていた。
そんな自分に苛立ち、
毎夜、寝床を抜け出して修練していたのだ。

「あまり遅くまでは明日にさし障る。休まれよ」
「…黒兵衛さんだって起きてるじゃないですか」
「拙者は忍びでござる」
「そう…でしたね」
つまりはその違いなのか、それならばかがりは黒兵衛を越える日は来ない。
そう思うとかがりは苛立った。
「もう少ししたら休みます。気にしないでください」

そうか、と言ってまた暗闇に戻り始めた黒兵衛が足を止めた。
「かなめ殿は」
黒兵衛はそう問いかけて「いや、なんでもござらん」と言葉を切った。

かなめは連日、精神修養に勤しんでいて、里から離れた庵からはほとんど出て来なかった。
たまに里に下りてきていたが、元々昼型のかなめと、
夜に重きを置く黒兵衛はあまり会う事はない。

黒兵衛がかなめの美貌に惹かれて伊賀を裏切った事は後から入ったかがりも知っていた。
その感情はわずかながら、かがりにも理解できる所があった。
なのでそれとなく、かなめの状況など、練習の際に世間話のように話したりしていたのだ。

「もう、お休みになられてますよ。」
「…うむ」
「この所、根を詰めて修行されてますから　たまに里に戻られてもすぐ休まれて」
「…うむ」
「…最近、お会いになられましたか?」
「数日前に山籠りに行った折に」
「お元気そうでした?」
「…うむ」

照れているわけでもなく、淡々と言葉の少ない黒兵衛との会話は弾まない上に面白くない。
いつもかがりが一方的に話すばかりだ。
「なにか、お話はされましたか?」
「美しいと、会う度に言っているが」
「…それだけですか?」
「心の底からそう思っている」
「…それはそうなんでしょうけど…かなめさんは何て?」
「やさしく微笑み返してくれる」
目に浮かぶようだ、きっと苦笑いだろう。

「あんまりそればかり言わない方がいいですよ。かなめさんは確かに可愛らしい方ですけれど、
お優しい所とか、才能とかを褒めてあげればきっと喜ばれると思いますよ」
「かなめ殿の才能…?」
「修行の成果とか、戦場で見られるじゃないですか最近はどんどん術の精度を上げられてて…」
言っていて、自分が黒兵衛に褒められたいと思っている事に気がつく。
そう思うと、なんだかもやもやとした気持ちになった。

「もう、いいです、
黒兵衛さんには分からない事ですから」
小川のそばの岩に腰かけて、黒兵衛に背を向けた。
この人は夜道の普通の歩き方だけでなく、女性の扱い方もどうやら分かっていないらしい。

「その…女性と関係された事はありますか?」
今まで無いはずはなかったろう、年齢を考えれば女房もいたかも知れない。
かがり自身、経験はなかったが、知識だけは持っていた。
ちょうとした好奇心だった。
「ある」
「どのような方でした?」
「どのような…とは? 戦場での事で、人数も分からぬ。 最中に死んだ者もいたが」
…聞くんじゃなかった。かがりは夜空を仰いだ。
男のなりをして、帰る家の道場もないとはいえ、かがりはここでは箱入り娘の部類だ。

「忍びの人はみんなそうなんですか?」
「何が」
「誰でも…いいとか、その、」
上手く伝えたい事が言葉にならないまま、脳裏に藤丸の姿がよぎる。
出来れば、そんな事はしていてほしくないと、乙女心が揺れた。
「別に気になるわけではないんですが。
いっしょにいる里の人達…殿方は…その、女性に対して
どう思っておられるのかな…と。」
「ふむ?」
「たしか風子さんが藤丸さんが奴隷としてなら…って…」
もしかしたら。
自分が知らないだけで藤丸は誰かとそういった関係なのかも知れない。
そう思うと、少し胸が詰まった。
そして、もしもそうなら。

「たとえば、藤丸さんが…いえ、殿方が魅力を感じる女性ってどんな感じでしょうか」
黒兵衛が藤丸について知っているとは思えなかったが、もしかしたら同じ忍びなれば…。
「私は…かなめさんや風子さんと比べても、あまり、女らしくはない…とは思いますし。」
「…?」
「小さい頃から父にも男勝りだと言われていて…姉上を見習えとか…」
姉を探す旅に出るときに耳の下でばっさりと切ってしまった髪先をいじる。
唯一、姉よりも美しいと言われた髪だった。
「かがり殿は十分、たおやか…というのか?そんな印象だが」
「ほんとですか?」
その黒兵衛の言葉は剣術の上達具合への感想でしか無かったのだが。

「私…女性として魅力的…ですか?」
まっすぐに期待をこめた瞳で黒兵衛を見つめる。
黒兵衛は困惑しながらも言わんとする事がようやく理解できた黒兵衛は空を仰いだ。
ただ、なんと答えればいいのかが分からない。
「あまり丁寧に扱う事は慣れていないのだが」黒兵衛がつぶやいた。
熱っぽく見つめるかがりの隣に座ると、するりと手を腰にまわした。
「黒兵衛さん?」

「かがり殿は拙者が気になるのか？」
「…！ちがいます！」
誤解を生んだことにかがりは気がついた。
あわてて立ちあがろうとするかがりを黒兵衛が後ろから抱きすくめた。

「拙者にはかなめ殿という心に決めた人がいるが…」
「ちがいます、あの、そういう事ではないんです！」
振りほどこうとするががっちりと締め付けられて息をするのも苦しいほどだ。
黒兵衛さん、ともう一度呼びかけようとして見上げた顔をつかまれ、唇を奪われた。
「んん…っ！っ？」
目の前の影と自分の唇への感触にかがりは驚いた。
どうしていいのか分からず、ただ、身を固くする。
黒兵衛はそれを了承と受け取り、こわばったままの唇を舐めまわし、
頬をつかんで強引に舌をねじ込ませた。
「かがり殿…」
「ん…は、はう…っ」
かがりは頭をねじって逃げようとするが、頬をつかまれて逃げられない。
舌が口中を犯してゆく、言いようのない感触にぞわぞわと背すじに不快感がよぎる。
「ふ…むん…んん…っ」
舌に乗せて黒兵衛がみずからの唾液を注ぎ込む。

あふれ返るそれを無理やり喉に流す。咳きこみそうな感覚に口をひらくと、
かがりの口内の唾液を黒兵衛が舐め取った。
そうして、また、唾液が送り込まれる。喉を唾液に犯されると
また、黒兵衛はその返しを求めた。
「ん…は…あ…」
何度も何度もお互いの舌を押し返し、絡める。
舌に乗せた唾液を交換しあう行為を強要されるうちに、
かがりは黒兵衛の舌の動きに応えるようになっていた。
耳にとどく、自分の体から発せられる水音がかがりを朦朧とさせていた。

かがりの頬をつかんでいた手はいつの間にか外されていた。
黒兵衛は器用にかがりの襟元をするりとゆるめる。
剣術の稽古の邪魔にならぬようにきつく胸を締めあげたさらしを強引にずり下げた。
「ん…っや…だ…」
片手で両手は後ろに押えこまれ、唇は未だ蹂躙されたままだ。
押さえこまれていた膨らみが月に白く照らされている。
さらしで分からなかったが、その膨らみはかなりのものだった。
黒兵衛はちらりと見やってごくりと思わず喉を鳴らした。

呼吸を忘れるほどに食られた口をようやく解放され、
ふたりの唇からはねっとりと唾液の糸が月にきらめいた。

黒兵衛はふるふると震える白いふくらみを下から持ち上げると、桃色の先端に顔をを寄せる。
そっと唇でふれると舌先で軽くなぞった。
「…っ！」
かがりはぞくりと背中をのけ反らせる。

武骨な節くれだった指が白い肌の上を這う。
がさついた指先がちくちく痛く、遠慮なく揉みし抱く。
黒兵衛の手の動きのままに膨らみはやわらかく形を変え、
強く絞り上げるとその部分が朱に染まるほどだった。
硬く目を閉じてその刺激に耐えるかがりの姿とあいまって黒兵衛をより、挑発する。

黒兵衛はその表情を楽しみながら袴の脇から手が入れ、かがりの秘芯をそろりとなでた。
かがりはびくりと肩を動かしたが、そのまま抵抗をしようとはしなかった。
内またはすでにじんわりと湿り気をおびていて、滑らせると難なくかがりの秘部へ指を導いた。
指でゆっくりと秘裂をこじあけると、濡れた蜜が温かく迎えた。
まだすこし硬い肉壁をそろそろとなでてやる。
「黒兵衛…さんっ」

ぞわぞわと這いあがってくる感覚に、初めて自分の体に起きている事への恐怖に襲われる。
黒兵衛の指はかがりの秘肉をこすり、その度に水音が少しずつ大きくなった。
やがて指の数も二本に増やされ、交互に来る波がかがりを翻弄した。

つい、流されてしまったが、ここで止めなければ、取り返しがつかない事になる気がした。
「待って…待って下さい」
かがりは喘ぐと、のがれるために体を引こうとした。
片手で腰をしっかりと引き寄せられてどうにも動けない。
いや、むしろ、動こうと体をねじるとその動きで自らの秘裂への刺激がより強くなった。

「あ…っ。あの、やめ…やめてください…！」
黒兵衛に抱きしめられ、動けないまま指の動きに意識が攫われそうになりながら、
かがりは吐息がかかるほどの距離の男の顔を見た。

黒兵衛が自分を見る目は静かだが、確かにその奥には情欲が宿っているのが分かった。
きっと自分もそんな目で黒兵衛を見つめ返しているのだろう。
自分がこういった事をしたいと望んでいる相手は黒兵衛ではないのに、そんな目で
見つめているのかと思うと、急に恥ずかしくなった。
「やめ…て下さい。私…こんな事したく…な…」
懇願する声には、誘う響きが含まれていることに気がつき、
かがりは羞恥に染まる顔を手で覆い隠した。

その手を黒兵衛は押しのけ、少し身をひくと黒兵衛は自らの肉棒を引き出す。
じっくりと見たことのないその剛直の姿にかがりは体を固くする。
「そんな…そんなの…無理…無理です」

弱々しく首を横に振ったが、かがりの黒兵衛を見つめる目に抵抗の色はもはやなかった。
「…興味があるのだろう？」
黒兵衛の目が意地悪く光り、かがりの体を引き寄せた。
「それに、もう、引けぬ」
向かい合うと足を開かせて自らの体を割り込ませる。
秘裂にあてがい、かがりの蜜を塗りたくると、ぬぷりと音を立てて貫いた。
「…っ…や…っ…！ひあっ…あ…！！」
上体を弓なり反らせ、足の筋肉が張り詰める。
反射的に逃げようとする腰を黒兵衛は両手でつかみ、より奥へとねじ込んだ。
「…ひあ…っ！」
根元まで挿入されたモノが内側で熱く脈を打つ。
「そこ…いたい…。やめ…てくださ…あ！」
かがりのはだけた胸元から豊満な乳房がこぼれ、止まった呼吸を整えようと身体が痙攣するたびにプルプルと柔らかく震える。
きつくくわえ込まれた肉棒を黒兵衛はゆっくりと引き抜く。
秘裂をにちにちと音をたてて圧迫する感覚に目眩がしそうだ。
「は…っ。は…あ、あ」
息をすることに必死な状態のかがりをみやりながら、肉棒を膣口近くまで腰を引いてやる。

「…は…はあ…っ」
すっとかがりの力が抜けかけた瞬間、またも肉棒を叩き込んだ。
「ひ…っっ！」
かがりの体が跳ねる。
呼吸が戻ろうとすると、また、引く。
そして、また。
うねるような刺激がかがりを蹂躙していた。
黒兵衛はまだ固い肉壁の弾力に眉をひそめつつも、ゆるゆるとぬるみが増していくのを楽しんでいた。
「かがり殿は…なかなか飲み込みが早い」
含み笑いを浮かべて黒兵衛がささやいた。
「ひ…っ、く、くろべ…さん…私…私…」
その声に弾かれるようにかがりの腰が動きだした。
「もう痛い以外の感触がある筈だ」
かがりの腰の動きに対してわざと腰をずらす。
「そんな…ちがいます、ただ…あの…」
欲しいという押し殺していた女としての本能をくすぐられる。
「かがり殿は素直になられると、いい。そうすればもっとよくなる」
「すなお…？」

「どうしてほしいか言えばいい」
焦らすように浅く、抜き差しを繰り返す。
「ん…っ…ぁ。ひど…い」
「んん？何がひどい？」
泣きそうな顔で黒兵衛を見上げるとおずおずと自らの腰を動かす。
秘裂をより黒兵衛のもので刺激しようとするがどうにもたどたどしい。
「あの…おくに…」
「んん？奥がどうかしたのか？」

体がより深く黒兵衛の肉棒を欲しがって治まらない。
熱く滴り落ちる愛液が黒兵衛の足を濡らす。

ふるふると羞恥に零れおちそうな涙をうかべながら、
「は…あっ。奥に…奥にくださ…い…！」
かがりが言い終わらぬうちに、黒兵衛が突きあげた。
「あぅっ…！」
太ももを腕で固定され、さっきよりも大きく膨らんだ肉棒が秘裂を擦り上げる。
十分に濡れていたとはいえ、その衝撃に一瞬息が詰まる。

「や…あっ。だ…め…ぇ」
体をひねってわずかに逃れようとしたかがりの表情が変わった。
そのかがりの変化に黒兵衛は見逃さなかった。
「ここ…だな？」
「や…っ」
腰をつかむとかがりの顔色が変わった膣内の一点をめがけて肉棒を抜き差しする。
「だめ…そこ…やぁ…ん！」
そのうねりに甘い嬌声を上げ続ける。
「や…は…あああ…っ。くろ…べ…さ…そこ…っ」
華奢な腰を壊れそうなほどに乱暴に扱われながらも、達するように追い込まれていく。

肉壁は黒兵衛のものと交りあい、お互いの快楽を貪る事にだけ気持ちを集中していた。
敏感な箇所を黒兵衛は容赦なく蹂躙をつづけ、かがりはそれに応えた。
「くろべ…さん…おねが…い、もう…わたし…こんなの…」
荒く息を吐きながら、乳房を震わせて懇願する。
肉棒が熱く脈打ちむくむくと膨らんだ。
乳房をわしづかみにすると、強く握り、腰を打ちつける。
「ひあ…ぁ！　それだめえ…！」
乳房の痛みすら、今のかがりには快楽だった。

「あっ…ぁ…も、あ…っっ」
弓なりにのけ反ると、這い上がってくる快楽にかがりは身をまかせた。
黒兵衛は一息吐くと、かがりの中に己の欲情をぶちまける。
膣内に熱い白濁が解き放たれ、つながっていた箇所からもどろりとあふれ出た。

「…あふれて…あ…ああ…ぁ」
乳房には汗の玉が浮いている。
黒兵衛はそれを舐め上げながら、かがりから肉棒を引きぬく。
引き抜かれた感触にかがりがぴくりと動く。

月明かりが黒兵衛の腕の中でぐったりとしたかがりの白い肌を照らしていた。
まだ白濁をひくひくと痙攣しながら秘裂から吐き出している。
かがりの快楽はまだ続いているらしい。
「かがり殿、拙者を、忍びをよく知りたいのであろう？」
「…？　くろべ…さ…？」
「これから、だ」
意識を失いそうな余韻にひたりながら見上げるかがりに、
黒兵衛はまた覆いかぶさった…。

月は先日よりも欠けて来ていたがまだ明るい。
水辺で刀を振るう、かがりには十分な明るさだった。
少し振るってその場の岩に座り込み、頭をうな垂れる。
わずかに草を踏みしだく音をかがりは聞き取っていた。
背に黒い影が落ちるのを感じる。
「黒兵衛さん、今日はふつうに来たんですね。」
振り返らずにその影の持ち主の名を呼ぶ。
「かがり殿はその方が好きなのだろう？」
「はい…」

「…かなめ殿は？」
「お休みになられてますよ、他の方達もみんな」
必ずこう応えるのがあれからの約束のようになっていた。

「…だから、誰も知りません…」
言いながらゆっくりと立ちあがり、かがりは黒兵衛の首に腕をからめると
その唇に自らの唇を押しつけた。

終わり

このゲームは
はぐれ透波という
忍び集団が戦乱の世を
平和に導くまでの
軌跡を描いています。

戦国サイバー
藤丸地獄変~~サプレイ~~まんが

あなたがこの世を
平和に導くのです

しょっぱなから
電波な巫女が
登場

更に女のコ見たこと
ないよーな
ヤバい集団に
押し掛け女房希望

行く所が
ないんです
里に住まわせて
頂けませんか？

えーヤダ
こいつら
臭そう～

正しい。

風子。

かなめ

それに対する
返答がコレ↓

奴隷の
一匹や二匹
飼うのも
悪かねーな！

ドン

これが
主人公の
煉獄藤丸

ちなみに
口癖は

死に
やがれ！

「言葉は乱暴だが
心はやさしい」と
プロフィールには
書いてあるのです
…が

うおーい
俺らの上司の
武田信玄が
死んだってよー！

ぎゃはは！

あのジジイ
ようやく
くたばりやがったか

ざまーねー

俺ら
自由ー！
上司いねー!!

仕事なくなったぜ
キャッホーイ

何する？
何する!?

この主人公始め
あんまりな性格の
方々にハートを
打ち抜かれました

第二幕にして
堂々の
ニート宣言

なんだかんだで
忍者戦争が始まります

まずは武田信玄の
正規軍の透波を
片づけて

あれっ!?
もう出番ナシ!?

次に伊賀軍
…なのですが

どけどけ

ザコ忍者はいしいひさいち風で。
(つぶら&ペーストですむから)

あの…どうして
見つめて
らっしゃるの?

…美しい…

なんんめ
えへへ、レイキ。
ホントはカオかしてて
不のPです

心に
想い描いていた
理想の女性と
うり二つ…!

貴女のため
なら伊賀を
裏切ります!!

ええっ!?

まあ
そんな事
言われても…

ギュッ

何か、こんだ
オマエラ

電波な巫女に
惹かれて更に
電波な忍者が
追加
(ストーカー)
黒ミツヒデと
ブラーます。

他にも
女剣士が
加わったり

上杉謙信と
主従契約を結んだ
…と思ったら
毒盛られて
裏切られたり

姉さんが
手伝ってよ

こっちも
レイキ

かがりちゃん

藤丸ひとりだけ
祠に連れ込まれて
おいしく
頂かれたり

ぜ―っ

…騙された…
…騙された
気分だぜ…

ぜ―っ

ボクはオンナ
イベントだろ
もう!

ボンクラ
プレイヤーによって
人間違いを
やらかしたり

お前
兄貴の方かよ!?

お前ら
見分け
つかねーんだよ

これだから
双子忍者は
メンドくさいな!

知るかー!!

どーすんだよ
せっかくの
ここまでステージ
やり直しじゃねーか

せっかく
レベルアップまで
させたのにっっ

ちなみに
この二人は
双子だけど
性格は真逆

「見た目だけ」は
ホントカワイイ。

藤丸への
反発心は
止まないです。

色々ふりかかる
禍いが終わらないので
スキに生きるためには
ジャマな忍軍をすべて
ツブそーぜという
非平和的な結論に至ります

さて
ここらへんで
このゲームのシステムに
ついてご説明

このゲームは
戦闘としての
シミュレーションステージと

キャラを育てたりする
里の運営などの二つに
分けられてます。

戦闘画面は
キャラユニットを
動かして味方、敵と
交互にターンを
繰り返して進む
スタンダードな作りです

キャラは
その経験値で
レベルアップ

ポーンッ！

おっ、レベルUP!!

そのレベルアップ
したキャラが

ザコキャラにまるで
歯が立たなかったりするのが
このゲームの
恐ろしい所でして

うをおおお

ずばっ

各々の「属性」と
言うものが
大きくモノを言います

そしてその説明は
ゲーム中には
無い という
……つまり

当たって
砕けろ！

バシィッ

……それは
プレイヤーの
気質に
よるのでは。

おたんじょうかいおめでとう

攻略本！
攻略本
見ましょう！
風子さん

その攻略本が
3冊出ている本のすべてに
なにかしら間違いがあると
いう状態だったりで

このやろう

装備とかややこ
しかっり全体
攻撃でるよう
キャラ接する
事なく
ディング
じゃそ
意味

後は、まー
ップの高低差
が分かりにくく
行った先が行き止
りだったりでキャラ
追い越し出来ない
交通渋滞が起きたり
アイテム

はー。

なのずと攻略本が
やっぱりまちがいだらけだ。

誰ですか!?
そこで、
それク●ゲーじゃん?
とか言ってるのは!?

ちょっと戦闘バランス
が悪いだけなんですっ
なので後半
ごにょごにょごにょごにょ

藤丸様の悪口は
こうかがりが許しません
せんよっ

その悪さすらも
たまらん快感になって
くるのが　このゲームの
不思議なトコだったりします

でも正直、人にはススメたくない。

余談ですが
このゲームには
「鳥瞰」モードと
いうのがありまして

その名の通り
バトルを空から
見る。

正直一度見たら
もう二度と見ません

酔います

でもせっかくだから。
必見ッ!

おええっぷ。

また、
このゲームの
最大の難関は
戦闘中に
セーブが出来ない
という事でして

戦いの最中に
中断など言語道断という
実に男らしい作りに
なっています

ステージに
よっては
二〜三時間かかる
モノもあり

そんな
ステージの
ラスト近くで
キャラが死んだ日
には、もう…

もっと…
生きたかった…

うおお…

けっこう
バンバン
死ぬので
このゲームの
タイトルが
地獄変なのは
ほんっとに
正しいです

ドM判定器
やも知れません
このゲーム

さて、
もうひとつの
隠れ里の発展&
修行モードですが

フツーに
剣術やら忍術の
修行するのも
もちろん重要ですが

農作物を作って
売ったり
用心棒や飛脚など
色々な仕事をして
稼ぐ事が出来ます

それらのお金で
馬買ったり
家の増築をしたり

ショボかった里が
ぐんぐん
立派になっていくのは
溜飲が下がります

※背景はイメージです。

鳥瞰のあの頃像 キブンで
ナーのレイい♡
このシステム大スキ。

まあ、そこも
プレイヤーの
腕によるトコは
あるのですが

せまーい

金は？

馬につぎこんじゃった♡

そんな狭い所に
仲間がガンガン
増えます

……仲間…？

天狗

かっぱ。

犬

もちろん
ちゃんと人間も

気に入らんかったら殺していーよ。

の手紙つきで甲賀からプレゼント。

いらねえよ

とにかく
カオス

ドパーン

ズバーン

ぎゃあ

フンギャーッ

祭りや

祭りや

中には
仲間になる際
金取る奴まで

戦いも
エスカレート
忍術も派手に
なって
龍召喚やら
天変地異やら

ぎゃおおん

果ては
ロケット
ランチャー
まで

出てくる敵は
主に忍び集団ですが

甲賀忍軍
伊賀忍軍
風魔忍軍
鉢屋衆
遁術忍軍
軒猿衆
雑賀衆
根来衆
柘植忍軍
十勇士
などなど

他にも
仲間全員に
化けて
混乱に落としいれる
果心居士や

ぴゃっぴゃっ
ぴゃっ！

音の反響…。

ナゾの
人形使いやら
もいたりと
戦いの日々です

そんな敵達に
藤丸の
モテる事
モテる事

はっはっはっ

はっは。はっはっ

お前と
同じ道を
歩んで
みたいんだ

男

服部半蔵正成

そーゆー
趣味はねえよ

男に熱烈な
プロポーズを
されたり

今夜はあいつらで
おいしいご飯を
作ろうねえ♪

わーい
藤丸の
お刺身！

ウキーッ

女サル

ああ、
このお刺身は
いわゆる
男体盛りな
意味ではなく

まんま、
食う意味だから
ちょっと違うか

ともかく
老若男女
問いません

いい男
だねえ♥

その体
たっぷりと
味あわせて
もらおうか

老婆

…これは
多分性的な
意味かと

その中でも一番
藤丸に執着している
のがこの人
霧隠才蔵です

なんといっても
美形で、戦力も高く
仲間として
実に頼りになる
ありがたい
キャラなのですが

いいカンジに
育った所で
藤丸と意見の対立
から離反して
しまいます

何だかんだで
似た者同士だとは
思うんです
よね―。
このニス。

彼がいなくなった
後、しばし
苦戦を
しいられました。
たよりにしすぎてて
も――…。

熱血タイプの
藤丸と

クールタイプの
才蔵

ウチに秘めてる
モノは
実の所どちらも
逆な感じが
またイイ

十勇士を率いて
立ちはだかったり
最後まで藤丸に
こだわり続ける
トコロが
たまりません

唯一、出生にまつわる
サイドストーリーが
攻略本で描かれたりと
もう一人の
主人公と言っても
いいキャラです

誰か何と
話そうと、
トラ。

にゃーん

とにかく個性的な
キャラ達と
コミカルなんだけど
どこか殺伐とした世界観
がとにかくイイです

あの戦いの
日々で得たモノ
失ったモノは
なんだったのか
色々思いめぐらされる
内容で

それは
主人公の藤丸も
例外では
ありません

エンディングでは
はぐれ透破の
隠れ里メンバー全員の
その後について
語られます

そんな戦いの日々も
終わりを迎え、

一人だけ
その後を上げるなら
裁縫屋甚也
（ネタバレすみません）

顔の醜さから
人々に嫌われて
書き置きを残して
行方しれず…という。
その書き置きには
「死」とだけ。

見目が悪くとも
その言動の
やさしさや
使い勝手の良さから
気に入っていただけに
このエンドは
しょんぼりでした

あのまま…とか…
①にいれば…とか…
②このエンドなださに
彼をおいやったのは
もとは藤丸では、と
逆うらみしたい。

総勢32名！
これがもう
…！

他のメンバーも
なかなかな
その後です

でも、

ええもう
イロイロ
びっくり。

このゲームが
私にとって
大好きなのは
このエンディングが
あるから…！

ううう
藤丸リメイク
しないかなあ…!!

一番言いたかったのはコレ。

■終わり■

かがりさん

いいんです、私は今のままで十分ですから

でも

■名代チャレンジ■

■原作：相丸・絵：酔花■

貴女の想いに藤丸様が自ら気付くなんて事はないでしょうし…

…実は今夜、藤丸様に呼ばれているんです

かがりさん

私の代わりに行きませんか？

え!?

あのタイプは押したもの勝ちだと思いますよ～

何気に藤丸さんって流されがちなトコありますし～

え

え

おい

かなめ居るか？

ちょっと

そうそう！歩き巫女の秘薬があるんです

コレを塗ってですねぇ～

コレの何がスゴイかって言うと千代女様信玄様

ぬぅぅ

あの

かなめさん

私がお手本を見せますからかがりさんもそれにならって

ああ違います

ここはこう…

あっあの ちょ…

ギラ

あ

そんな所…っ

かなめさんだめ…っ

悪い邪魔したな

ピシャッ

ああっ

違…っ!!

誤解です藤丸さま

私そういう趣味じゃ

うわあああん

ああああごめんなさいかがりさん——っっ!

■END■

藤丸地獄変・「密通」
『かなめ、自分で出せるいつまでも子供扱いするなよ』
『ふふ、そうですか？さ、藤丸さま、いらして下さい』
「黒兵衛はまだ見てるだけなのか？なんでしないんだ？』
「見ている方がお好きなんだそうですよ」
「へえ、変な奴だな気持ちいいのに』
「くすくす、藤丸さま、どこか分かりますか？』
「うるせえなもう覚えてるって
ここだろ？
ああもう、びしょびしょに濡れてるな」
「こうなってたら入れていいんだよな？」

「焦らすなよ、かなめ、早く入れさせろよ」

「あら、才蔵さまを小夜さんと蘭さんが取り合って」

「ふふ、どちらが才蔵さまのを飲めるのかしら」

昨日も昼間にやろうって言ったのにダメだっていうからガマンしてたんだ」

「なあ、なんで昼間はしちゃダメなんだ？俺はもっとしたいのに」

その話はするなって才蔵が言ってたろ傍太や楽天丸達にも言うなってさ」

「藤丸さまは里から出た事がなかったですからね才蔵さまは書物などで少しはご存じでしたから」

「ん…ぐ…ぬ…ぬ…」
藤丸はいったいどこに…
どうなってしまったのか…
「ぐ…ぐぬ

「かなめ殿、大丈夫ですか」
「…黒兵衛さま」
「かなめ殿、今まで貴女方が歩き巫女として様々な方々に通じて来られた事は分かっております それは何もいいますまい」
「ですがこの里でこうする事には何の意味もないのではないですか？」
「黒兵衛さまふふ…湿っていますよ出されたのですね満足されましたか？」
「かなめ殿…？」
「見ているとちゃんと勃つのですね」
「黒兵衛さま私の中に入れる事は出来なくともこうして快楽を共有する事は出来る筈です」
それは意味のあることだと思いませんか…？」

終